

山上龍彦

KOGEN NO
OJYOSAN

Yamagami
Tatsuhiko

Kadokawa-shoten



高原のお嬢さん



KOGEN NO OJYOSAN

Yamagami Tatsuhiko

高原のお嬢さん



山上龍彦

Kadokawa-shoten

山上龍彦(やまがみ・たつひこ)

1947年、徳島県生まれ。少年時代を大阪で過ごす。'90年、漫画家生活にピリオドをうち、作家活動に入る。作品に『兄弟！尻が重い』『太平』(ともに講談社)、『蟬花』(集英社)がある。

高原のお嬢さん

平成七年六月三十日 初版発行

著 者——山上龍彦

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店



東京都千代田区富士見二一三三
〒102 振替〇〇一三〇三一九五二〇八
電話／営業部〇三三八一七七八五二一
編集部〇三三八一七八四六一

印刷所——凸版印刷株式会社

製本所——株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本は小杜角川ブック・サービス宛にお送り
ください。送料は小杜負担でお取り替えます。

©Printed in Japan ISBN4-04-872857-1 C0093

高原のお嬢さん

装订／高橋雅之
装画／廣中 薫

目次

第一幕 高原のお嬢さん

5

第二幕 百万石とお嬢さん

53

第三幕 潮騒のお嬢さん

103

第四幕 握り野郎とお嬢さん

163

第五幕 女横綱とお嬢さん

219

第一幕 高原のお嬢さん

幼い頃の記憶の一点が、緑とすみれの花にふちどられているのはとてもしあわせなことだと美弥子^{みやこ}は思う。

緑は笹で作った小舟で、すみれは高原の駅舎のそばの道端に咲いていた可憐な道しるべだった。

双六高原^{すいろく}を再び訪れることがあれば、幼い自分に笹の小舟を作ってくれた人物にもう一度会いたい。そして、あの土地を訪れるのはすみれの花の咲く頃にしよう——そう彼女は心に決めていた。

十五年の年月を経て高原の駅に下り立った美弥子^{みやこ}は、彼女の望んだ情景のひとつに出会うことができた。駅舎のそばの道端には彼女を待ちうけるかのように赤紫色の可憐な花びらが風にゆれていた。そして、彼女の予期せぬこともおこった。鈴の音と小気味よい蹄鉄^{ていこ}の響きがそれであった。

「お嬢さあん、お嬢さあん」

馬車を走らせて来たのはたくましく日焼けした青年だった。肥沼^{ひぬま}為治——、双六高原の

牧場主の長男である。肥沼家と美弥子の家、大原家とはそれぞれの曾祖父の代からの縁浅からぬ関係があつた。十五年前、四歳の美弥子が高原の別荘にやつて来た時、一つ年上の為治は彼女のよき遊び相手だつた。為治はその時のことをぼんやりと憶えている。何か、とても甘い匂いのする、ふわふわした生き物と幾日かじゃれあつた夢のような記憶だつた。大原家の別荘はもう長い間使われていなかった。そこへ久々に人がやつて来る。しかも、それは為治が幼い日に一緒に遊んだあの女の子なのだ。為治は矢も楯もたまらず馬車を駆つて来たという次第であつた。車ではなく観光用の、カラフルな日覆いひおほいのついた古風な乗り物にしたのは、女心を、彼女の歓心を少しでも買いたいという若者らしい情熱からである。

木造の、白い小さな、お伽の国にあるような駅舎の前に立つたお嬢さん——大原美弥子の姿は、さながらマリ・ローランサンの絵であつた。為治の十五年の淡い想いが一気に熱いマグマとなつて上昇した。美弥子も、馬車の上から手を振るこの土の匂いを放散する大柄な若者の姿に甘美な衝撃をおぼえた。

「大原のお嬢さんだね」

「為治ちゃんね」

青年からの問いかけにすぐさまその言葉が出たのは、美弥子の心の奥底にも、彼女自身は気づかない脈々とした特別の感情が眠り続けていたためかもしれない。何しろ、美弥子は今日ここへ為治が迎えに来ることなど知らなかつたし、幼いあの日以来、為治の写真も

見ていなかったのである。

別荘のお嬢さんの久々の里帰り、だというので歓迎パーティーが催された。

会場は町の民宿を兼ねたレストラン「銀嶺」である。幼い美弥子がこの高原に来ると、よく一緒に遊んだという地元の若者が集まった。といつても、むろん十何年も昔に幾日か別荘に滞在しただけの美弥子の顔を憶えている者はなく、ただ都会から来たよそ者が珍しいというだけの田舎人特有の好奇心が彼等をそこに集わせていた。町では一番古い旅館「かめや」の息子の井口倉吉が乾杯に先だつて挨拶をした。

「ええ、本日は皆様ご多忙中にもかかわらず、ようこそおいで下さいました。ただいまより大原美弥子さんの歓迎会を始めたいと思いますが、その前にひと言」

と言つて井口はまだ乾杯もせぬビールをぐいと一口飲んだ。「こら、ずるいぞ」という声が座の片隅で上がったが、井口は涼しい顔で言葉を続けた。

「皆様もよくご存知の通り、美弥子さんの曾祖父さん、大原弥八郎氏は、この町の、この高原の恩人ともいふべき方であります。弥八郎翁は明治の時代に海岸の埋め立てや鉄道敷設、また都市ガスの整備などを手がけられた公共事業家でありますが、その昔、狼や狸や猿の天下であつたこの地を開拓し、牧場を作り、酪農、畜産という新しい農場経営の世界へ我々の祖父や祖母を導いて下さった方でもあります。弥八郎翁の物心両面にわたる援助で幾人もの青年がアメリカへ渡り、酪農の精神と神髄を学んだのであります。ここにおら

れる肥沼牧場の御曹子為治君の曾祖父^{ひいおじい}さん喜平氏は、双六高原の酪農農家のさきがけとなつた方ですが、その成功も大原弥八郎翁の後ろ楯があればありえなかつた。本日は我が双六町発展の礎^{いしづえ}となつて下さつた弥八郎翁の曾孫であられる美弥子さんをお迎えすることができ、町民一同感涙にむせぶとともに、郷土発展の黎明^{れいめい}へ想いをはせ、先人の流した血と汗への感謝の思いを新たにすることであります」

大時代な挨拶に一同苦笑したり、うんざりしたり、ともかく乾杯の音頭がとられ歓迎会は始まつた。集まつた顔ぶれは男女あわせて二十名あまり、男が圧倒的に多いのは美弥子の美貌のニュースが広まつたせいである。

若い衆の興味の焦点は美弥子である。

「えらいべつぴんじゃなあ。ものの言い方や仕種にも何ともいえん品がある。あれがほんまの令嬢ちゅうもんじゃるか」

「成り金の娘とはわけが違うわな。さつき井口がゆうた通り、明治の大事業家の曾孫じゃもの。あの美しさは旧家の伝統が作り上げた工芸品みたいなもんじゃ」

「何が明治やね。明治ならたかだか百年ほどしかたつとらんじゃないか。百年程度で旧家とは片腹痛いわ」

男どもの美弥子への賛美を、苦虫をかみつぶしたような顔つきで聞いていたのは土産物屋の次女の杉江である。彼女は骨付羊肉のローストとグリーン・アスパラのゆでたものを両手に持ち、交互にかぶりついていた。唇の右端は肉汁で、左端はアスパラにそえられた

マヨネーズでだらしく汚していた。

「あほ、大原家は明治以前から続いとる家やぞ。ご先祖は伊達藩かどこかの家老だったという話だ」

「佐渡の奉行支配目付だったとわしゃ聞いたが」

「ほれみい、言うとする尻から素性があやしゅうなってきた」

「うるせいわ。三年もさかのぼりや何をやとったかわからん家の娘のくせして」

どつとまわりで笑い声上がる。

美弥子は酒は嫌いではない。といつてもまだ半年ほど前から飲み始めたばかりなのだが、わりあい自分の体質にあつた飲物だという気がしている。それだから、つがれるビールやワインを調子にのつてうけていたら頭ががんがんにして、気分が悪くなってきた。

何しろ、男どもが本物の深窓の令嬢の香氣にあやかろうと、入れかわり立ちかわりやつて来るのだ。

「ウイリー、やれ、アルプスの唄じゃ」

と誰かが言うのと、整髪料で頭をてかてかに光らせた男が立ち上がった。寄席の色物芸人を思わせる風体をした男の喉から突然裏返った声が飛び出たので、美弥子は手にしたグラスを落としそうになった。

「ウイリー・笹山だ」

いつの間にか美弥子の横に来て、べったりとはりつくようにして飲んでいた親爺が乱杭

齒をむき出しにして歌う男のことを紹介した。

「スイスのちれるたらゆう所でヨーグルトの勉強をしてきよったんじゃ」

「おっさん、それを言うならチホルでヨーデルの勉強じゃ」

親爺の隣から太った若者が首を突き出す。

「まあ何でもええわい。あれはなかなかの芸達者じゃ」

ウィリー・笹山の歌っているのは、スイス、オーストリアの山岳地帯の民謡らしい。しかし、どう聴いても美弥子にはそれは演歌の節まわしとしか思えなかった。地声と裏声が交互に入り交じるヨーデルの部分だけがそれらしかったが、それも耳をすませるときわめて日本歌謡的哀調をおびた音律なのだった。

乱杭齒の親爺の齒のすきまから抜ける唇音や、ウィリー・笹山の、照明に照り返る髪的光沢を見つめるうちに美弥子は胃袋がしだいにせり上がってきた。そこへ洗面器ほどの大きさのボール鉢に豆腐が山盛りになって出てきた。テーブルをはさんだ向かいに座っている為治が笑いかけ、「牛乳の豆腐だ」と言った。仔牛を産んだ直後の母牛からしぼった牛乳でなければできない珍しいものだという。

チーズと牛乳の間のような味がするらしい。普段なら食欲を誘ってくれるかもしれぬ、酪農の地元ならではの貴重な食べ物も、その時の美弥子には刺激が強すぎた。鼻孔に、生まれたばかりの仔牛の生臭い乳の臭いがむっと広がった。美弥子は席を立ちトイレに駆け込んだ。

胃の中のものをすべて吐いた。

それでも吐き気はおさまらなかった。美弥子は廊下に置いてあるビールのケースの上に座り込んで肩で息をついた。

為治が宴たけなわの部屋のドアを開けてこちらをのぞいていた。女性が用足しに行ったところへ足を向けるのは気がひけるらしく、為治は首を突き出したまま「大丈夫か」と訊いた。美弥子はうなずき返したが、その仕種があまりにも頼りなげに見えたのであろう、為治は部屋から出て駆けよった。

「飲みすぎたかな。旅の疲れもあっただろうし」

「ごめんなさい。調子にのりすぎたみたい」

「学生のコンパなんかでもお嬢さんはこんなに飲むのか」

その問いに答えようとして美弥子は顔をそむけた。為治の口からあの生々とした濃厚な乳の臭いがしたのである。

「どうした」

為治の顔がぐっと接近した。

「何でもな……」

また臭いがして、美弥子は今度は体をよじって為治の口臭からのがれた。

「田舎者の口はそんなに臭いのか」

為治が悲しげに言った。

「違うの、ちよつと……」

と言いかけてまた吐き気がこみ上げてきたので顔をそむける。

「そうか……、そんなに嫌われたんならしょうがねえや」為治は一人合点し、それでも氣をとりなおしたように、「とにかく、別荘まで送って行く」と言った。

高原の闇の中を為治のワゴン車は走る。

双方口をきかない。一人は嘔吐をこらえているため、一人は思いもよらぬ侮蔑を、あこがれの異性からうけたと思ひ込んだがためである。ライトに照らされた前方を時おり小動物の影らしいものが横切る。エンジン音と車体にふれてゆく風の音だけが車内に満ちていた。と……それへもうひとつの音響が加わった。リズムカルな地を蹴る音だった。音はしだいに接近して来た。

(蹄の音……)

車の脇を何か黒い大きなものが走り抜けた。次の瞬間、それが前方へ出てライトに浮かび上がった。馬だった。乗っているのは若い女——まだ少女だった。

「ちい」

為治が舌うちした。アクセルが踏み込まれた。車の速度が増した。馬はそれでも車にびたりとついて走って来る。

「危ないわ、止めて為治ちゃん」

「その為治ちゃんというのはやめてくれ。おれのほうがお嬢さんより一つ年上なんだぞ」

「じゃ、為治さん、止めて」

車は速度を落とし、停止した。

少女は馬を車へよせると、後脚あとあしで立たせた。昔の西部劇のヒーローが映画やテレビで見た、あの馬の後脚立ちである。いななきと猛々しいその姿勢で馬は何か馬以外の怪物のように見えた。後脚で立った馬は前脚を車のボンネットの上に叩きつけるように置いた。車体が傾いだ。鞍の上の少女は、騎手としての高度な技術を要するであろう手綱さばきをもなげにやってのけている。

馬は長大な前脚を交互に振り上げてボンネットを叩いた。ちょうど車の前部を馬がピアノがわりにしている恰好である。

「やめんか、こらあ」

馬がさらに激しく車を乱打した。

車が前後左右に大きく揺れた。

「やめてくれえ、車がこわれる」

為治が悲鳴を上げながら外へ飛び出た。

少女と馬は攻撃をやめた。ライトの中に立つその姿は凛りんとして美しかった。ポニー・テールの髪がきらきらと光った。少女は光の中から動こうとはしない。まるで自分の美しさを誇るかのように——いや、確かに彼女は見せつけていたのである、その姿を美弥子に向かつて。少女は人差し指をまっすぐに車の中の美弥子へ向けた。